

〔徒然草<sub>下</sub>〕貝をおほふ人の、我まへなるをばをきて、よそを見わたして、人の袖のかげ、ひざの下まで目をくばるまに、前なるをば人におほはれぬ、よくおほふ人は、よそまでわりなくとるとは見えずして、ちかきばかりおほふやうなれど、おほくおほふなり。

〔野槌<sub>下</sub>〕貝をおほふ 貝あはせの事なるべし

〔女用<sub>教訓</sub>繪本花の宴<sub>貝おほひ</sub>〕

まづ我かたの貝をみつゝして、扱よその貝え目をくばるべし、出し貝のたび／＼に、われはやくおほはんとそう／＼しきはみぐるし、玄とやかならんには、二見の浦めるけしきもなく、誠のすさみを今ぞある、とよめる西行にも見せたりし。

〔源平盛衰記<sub>五</sub>〕行綱中言事

多田藏人行綱ハ、略○中五月元承廿日、西八條へ推參シテ見レバ、馬車數モ知ズ集タリ、藏人何事

ヤラント思テ尋問ケレバ、案内者トオボシクテ答ケルハ、是ハ入道殿清盛○平福原御下向ノ御留守ニ、君達會合シテ、貝覆ノ御勝負也ト云ケレバ、略○下

〔玉海〕壽永元年二月十八日己未、午刻參御堂、今日供養百種於舍利之、次有佛經供養事、佛者如意輪繪像、御平生之時雖被圖寫、未遂供養、今日依爲吉曜、遂之、經者蛤貝書之、聖靈門皇嘉○院 平日殊令始貝覆之、戲給、仍爲翻彼罪、所寫眞實之妙文也、且先例多存故也、

〔藤原隆祐朝臣集〕住吉に侍しに、都より知たる女房あまた天王寺に詣で、侍しかば、住吉の神主經國女に、おほひかひこはんとおもふに、歌のそへたきよし申侍しかば、讀てつかはし侍し、波よするつもりのうらによる貝をひろはぬ袖にうつせとぞ思ふ

返し貝にかきて

たづねきてひろはぬ浦のつらければ袖につゝむにかひやなからん